

研究主題に関する基礎的研究

1 参与観察について

参与観察とは、現象が起きている現場に観察者が身を置いて、集団内部から対象を観察したり、観察者も内部の一員として体験した意識内容を記録したりして、そこに生起する事象を多角的に把握する研究方法である（澤田・南 2002）。本研究での研究者の立場は、参与観察者として、メモ用紙への記述、ビデオ撮影、カセット・テープ録音、さらに対象者に直接インタビューを行うことでデータの収集を行う。

2 質的研究について

「質的」とは、主に記述的なデータを使って言語的・概念的な分析を行うという意味である。この質的研究は一枚板ではなく、エスノグラフィ、エスノメトロジー、グラウンデッド・セオリー法、ライフストーリー法等、さまざまな理論背景をもつ研究である（能智 2000）。参与観察等により、対象者の経験世界を対象者の経験に近い形で理解したり、対象者の人生とその意味づけを読み解いたりして、そこから仮説や理論を積み上げていく研究である（図1）。このことは、「いまここで何が起こっているのか」を初めて見るようなまなざしを必要とされる心理臨床の場でのクライアントへの関わりにも通じるものと思われる。

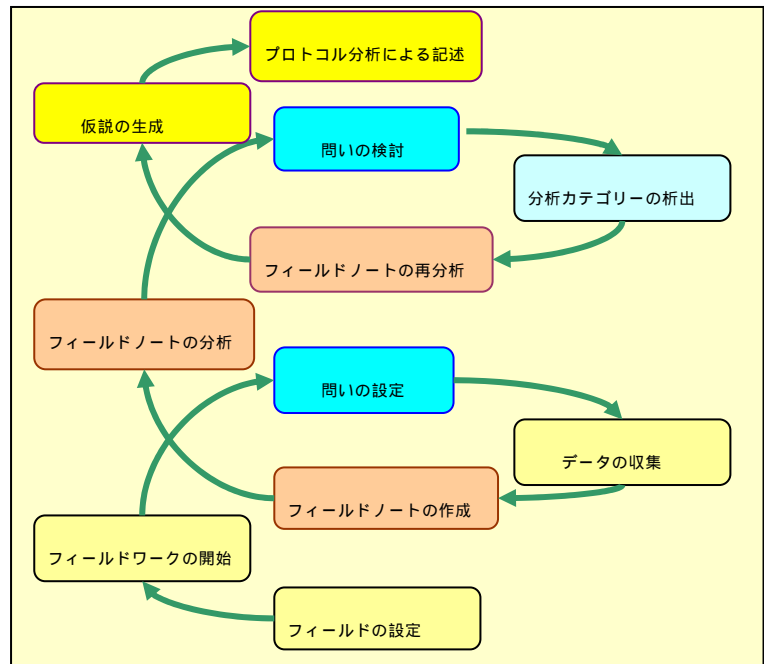


図1 仮説生成までの研究の螺旋的な流れ

研究の方法

本研究では、ピア・サポートのトレーニング場面における教師と生徒の相互関係を、参与観察によって探るという研究の目的から会話分析を用いる。会話分析の方法論的特徴として、資料は通常、会話やインタビューなどの内容を録音・録画などをとおして詳細に記録することによって得ていく。

1 対象学年

研究対象として、平成 12 年度から総合的な学習の時間で福祉の領域に取り組んでおり、平成 14 年度にピア・サポートを取り入れ、施設訪問等の実践場面で生徒の主體的な活動をさらに高めたいとする県内の中学校 1 年生を選定する。本研究を実施するにあたっては、研究への理解を得るために、開始前に当該学校を訪問し、教職員

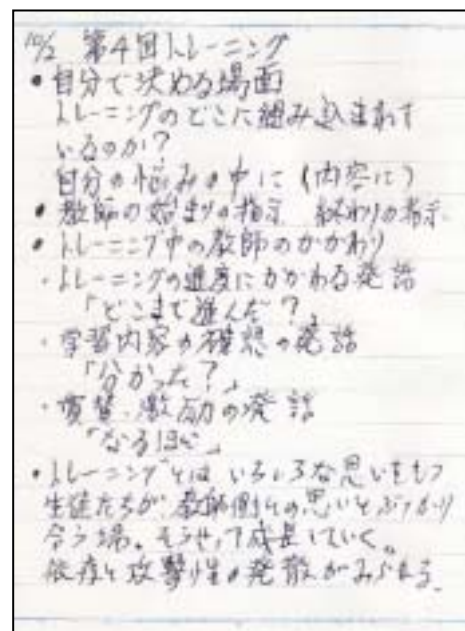


図2 メモ帳(観察データ)

の了解を得た。

2 データの保存と記録の方法

観察中のデータについては、「観察データ」と「インタビューデータ」に分けて、A5版のメモ用紙に保存する(図2)。トレーニング場面で観察者が聞くことができる発話については、「トレーニング中のコミュニケーション場面の観察により、はじめて意味が理解される発話」を「観察データ」とし、また、「インタビューをすることで話し手がかつ解釈枠組みを探る手がかりとなる発話」は「インタビューデータ」として保存する(表1)。

表1 データの種類

観 察 デ ー タ		インタビューデータ
行動	発 話	発 話
教師・生徒の行動	トレーニング中のコミュニケーション場面の観察により、はじめて意味が理解される発話	話し手がもつ解釈枠組みを探る手がかりとなるもの フォーマルインタビュー (あらかじめ日時や内容を決めて授業実践者や生徒に質問するもの) インフォーマルインタビュー (必要に応じて授業実践者や生徒に質問するもの)

この観察から得られたメモの他に、ビデオとカセット・テープの収録により得られるデータもフィールド・ノートに記録としてまとめていく。フィールド・ノートは、内容を〔観察記録の部〕(A4版ノート左半分)と〔解釈・省察の部〕(A4版ノート右半分)の2部構成とする。〔観察記録の部〕には、カセット・テープの録音から得られるデータを中心に、ビデオも視聴しながら、時間軸に添って、トレーニング場面やインタビュー場面の教師・生徒の発話をそれが生じた文脈がわかるように逐語記録として記入していく。〔解釈・省察の部〕には、「個人メモ」「理論メモ」「方法論メモ」の3つの備忘録を書き留めていく。「個人メモ」には行為者の発話の特徴を、「理論メモ」には、観察の中から見えてきた視点や自分が学んだ理論とデータとの関係など観察されたデータの理論的な示唆を、「方法論メモ」にはプロトコル分析の進め方についての注意点や改善点を記録する(図3・図4)。

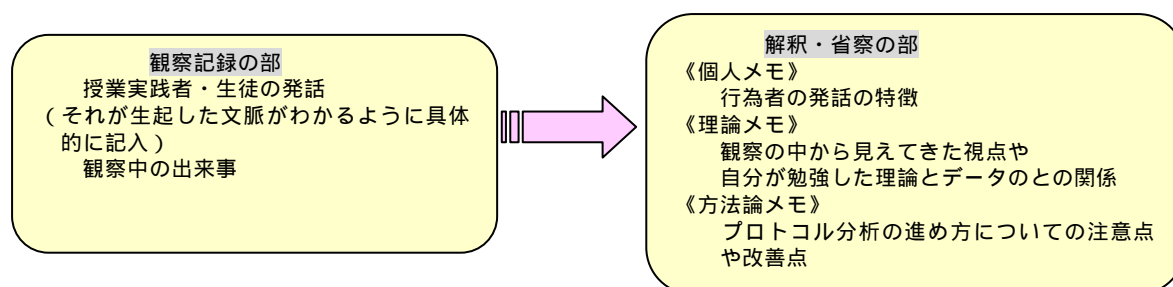


図3 発話の記録方法

3 観察期間と観察時間

2002年9月から2002年の10月までの2ヶ月間であり、総合的な学の時間が実施される水曜日の5・6校時を中心に、ピア・サポートのトレーニング場面に参与観察する。

研究計画

参与観察を始めるにあたって、目の前で起こっていることを自分の先入観を取り除いて見つめるということが、いかに難しいかを研究に取りかかる5月の段階で感じていた。

そこで、まず観察者である自分自身の行動を意識化する意味で、自己観察を行うことにした。自分の行動とそのときの意識をできるだけ正確に日記に記録することにした。この自己観察によって自分の考えの枠組というものを改めて知ることができた。

次に、実際にプロジェクト・アドベンチャーのトレーニング場面に参与観察者として入り、メモやビデオのデータを基にプロトコル分析を試みた。ここでは、自分が問いをもってフィールドに入らなければ何も見えてこないことなど、多くのことに気付くことができた。「フィールド・ワークのワザは、フィールド・ワークをすることによってしか身に付かない」という箕浦（1999）の言葉の意味がよく理解できた。

このような準備を基に、以下のような計画で実践に臨んだ（表2）。

《解題・省察の部》		理論メモ（理論とデータの関係）
個人メモ（行あるについての観察）		
<p>Aの思考の流れ ①兄と共有中、 ②ほとんどの兄が 使った。</p> <p>③辞には出てい るが動いてくれ ない親。これに も関係している。 2重の悩み。</p> <p>④「一瞬、と言われ る気持ち。自分 分て」に対する 弁明。</p> <p>⑤言っても動いて くれない。</p> <p>沈黙17秒の意味 B: 親に言っても「やってくれない」 としてたら 別の方法は?</p>	<p>Bの思考の流れ ①部屋がなぜ理由 を失いたいの。 ②悩みを解決し たい存在としての 親。親がたが 解決してくれな いのか？</p> <p>③他人はかたて なく自分は「や りたくない」(自分 分て)をやる気はない のか？</p> <p>④「それはいいこと 」(はてはできない) を親に言わない 理由。</p>	<p>理論: 発話の意味のあり方 《行動的な意味》 = 発話する、それを聞くという相互 行為のさなかに相互行為そのもの によって作られる意味の面がある。 = プロトコルという発話行為によって 社会的秩序を作り出し、それを維 持しようと努めると同時に、この 秩序によって発話行為の場が制 約される。</p> <p>データ ・3A「すごい愛をきた」と言っている がそれ以外に自分の部屋をほしい 理由がある。15Aで「あ兄ちゃん の物はかたて自分の物かほとんど なくて」と語っている。ここがAで 本当の理由が語られている。 ・言っても親が動いてくれない理由 かたてを3A, 9A, 13Aは語っている。 7A, 9Aは、Bの問いかけに対する 防戦のようと思える。 なぜか？ Bの問いかけに、Aの感情にふれる</p>

図4 データ8のフィールド・ノート

表2 研修の全体計画

期日		研修の内容	備考
4月 ～ 5月	基 礎 研 究	<p>(1)文献研修</p> <p>(2)自己観察（日記記録） ジャーナルの作成 ・出来事や活動を時間経過と共に記録 ・主観的反応を記録 重点的観察記録 ・上記の自己観察ジャーナルより、1つの行動、事象を選び、 それを中心に自己観察する。 自己観察の目的 ・自己の行動を意識化する練習 ・観察法という手法のツールである自分の鍛錬</p>	<p>(1)教育相談、カウンセリング、ピア・サポート、 質的研究、プロトコル 分析等に関する文献を 中心に文献研修を行 う。 (2)自己観察を行うことで、 自己理解を深め、参与 観察における資質の向 上に勤める。</p>
6月 ～ 7月	ブ レ 実 践	<p>(3)プロトコル分析のプレ実施 6月22日（土）～6月23日（日）に実施された『あかぎ自然学校 宿泊体験』（プロジェクト・アドベンチャー）に参加し、発話を中心にプ ロトコル分析を実施する。 ・メモとビデオを参考にファシリテータと受講者の発話から相互関係につ いて分析する。 8月20日の訪問に向けて、プロトコル分析についての資料を作成し、イ ンタビューの項目等を準備しておく。</p>	<p>(3)データから得られたこ とを、「ファシリテー タ・参加者の発話」と 「VTRを観て気付い たこと」に分けて分析 していく。</p>

8月	実践の準備	<p>実践校を訪問し、ピア・サポート、プロトコル分析について理解を求める。 授業実践者のトレーニング・プログラムに期待することなどをインタビュー等とおして把握する。</p> <p>実践授業者同士によるトレーニング場면을観察する。 トレーニングを体験して先生方がどのように感じたかインタビュー等とおして把握する。</p> <p>8月20日のトレーニング・プログラムの観察から得られたデータを分析をする。</p>	<p>校舎の配置図、教室位置などの学校環境を確認する。</p> <p>授業実践者とのラポートづくりに努める。</p> <p>記録の手段としてメモ、テープ・レコーダ、ビデオを用いる。</p> <p>「トレーニング実施場面から何が見えてくるか」という問いをもって、プロトコル分析を行う。</p>
9月 ～ 10月	実践	<p>第1回～第4回(9/4・9/11・9/18・10/2)のトレーニングの体験場면을観察する。</p> <p>教師と生徒にトレーニングの感想等をインタビューする。</p> <p>各自の課題をもとにした、個人プランニングの場면을観察する。</p> <p>メモ、カセット・テープ、ビデオ・テープをもとに得られたデータをフィールド・ノートにまとめ、プロトコル分析を行う。</p>	<p>観察やインタビューがトレーニングの実施の妨げにならないように心がける。</p> <p>「トレーニング場面から何が見えてくるか」という問いをもって、プロトコル・データを分析する。</p>
11月 ～ 2月	まとめ	<p>研究報告書のまとめ</p> <p>ぐんま教育フェスタ2003に向けての準備と発表</p>	<p>プロトコル分析から得られた結果をまとめることでピア・サポートに関する理論的示唆の提示をする。</p>